
ボクと皆のバカテス日常

F O O L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクと皆のバカテス日常

【Nコード】

N5823W

【作者名】

FOOL

【あらすじ】

神の悪戯で死亡した少年。お詫びとして転生した先は、バカとテストと召喚獣の世界だった。

第0話 俺とボクと転生者（前書き）

初めてで緊張しています。

第0話 俺とボクと転生者

「ここはどこだろう？一面真っ黒な空間にいた。辺りにあるのは

.....
「すごく綺麗でボンキュボンなお姉さんだ。」

「セクハラですよ。それ？」

思わずつぶやいた言葉に頭を軽く小突かれてしまった。

「あの〜ここはどこでしょうか？」

「天国と地獄の狭間です。死者の魂はここで天国か地獄へいく判決を受ける場所です。」

「ということは俺、死んだんですか？」

「.....意外に冷静ですね？」

やや困惑しながら問いかけてきた。

「ここが普通の空間ではないことは何となくわかりましたし、車に轢かれた記憶がありますし。」車に轢かれそうになった少年を突飛ばして代わり轢かれたんだ。

「じゃあ、あなたは女神ですか？」

「申し遅れました。私はアテナと申します。」

「アテナってギリシャ神話のゼウスの娘さん？」

「はい。合ってます。」

「で、そのアテナさんが俺に用なんですか？」

俺の問いにアテナさんが言いづらそうに答えた。

「実は、あの交通事故は、私の部下が悪戯で起こしたものです。」

.....はい？

「ですから、私の部下があの子を轢こうとしたんです。」

なんだって？

「ふ…ふ…ふ…」

「ふ？」

アテナさんが首を傾げた瞬間、

「ふざっけんなぁー！！」 感情のまま叫んでいた。

「あのガキが何か悪いことでもやっただけなのか！！神だが高んだか知らないけど、やって良いこと悪いことがあるんだぞ！！」

アテナさんが悪い訳じゃないのはわかってるが、それでも言うにはいられなかった。俺の咆哮にアテナさんは微笑むと俺をやさしく抱き寄せた。トクントクン。アテナさんの鼓動が興奮していた俺を落ち着かせる。

「落ち着きましたか？」

慈愛の眼差しに顔を紅く染める。

「は…はい。すいません。アテナさんが悪い訳じゃないのに怒鳴り散らしちゃって。」

「いえ。それで、こちらの不手際で亡くなったのですから、異世界に転生して戴くというのはどうでしょうか？」

「なら、『バカとテストと召喚獣』の世界でいくつか特殊能力付でできますか？」

「はい。できます。それで、どのような能力が欲しいのでしょうか？」

「瞬間記憶。高速筆記。速度は1分で400字詰め用の紙30枚にびっしり書き込めるくらいの速度で。仮面ライダーWのフィリップの能力。」

「…どれも可能です。」

「では、フィリップの能力に制限を。未来を読む事が出来ない。他にアテナさんの許可なく他人のプライバシーに関する記録は読めない。にしてみられますか？」

「はい。わかりました。」

「それと、アイツと一緒にバカやって楽しみたいから吉井明久の幼なじみにしてください。」

「はい。わかりました。」

「最後にひとつ。あのボウズを殺そうとしたアテナさんの部下にキツイお灸を据えて欲しい。」「ご心配なく。コキユートスで永久封印刑に処される事になりました。」

そういうことなら問題ないか。アテナさんが指をはじくと少し先にドアが現れた。

「そのドアをくぐれば転生されます。赤ちゃんからですが、新しい人生（命）を楽しんでください。」

「ああ。ありがとうアテナさん。……………そうだ。あのボウズと母さんに幸せになつてと伝えてくれませんか？」

「いいでしょう。必ずお伝えいたします。」

「何から何まですみません。」

そう返してからドアの先へ向かった。

第1話 ボクとアキくと迷子の女の子（前書き）

感想をくださりました、鳴神 ソラ様、光閨雪様、まあ様、及び、この小説と、一人が踏んだ失態^{ミス}？を呼んでくださりました皆様ありがとうございます。

原作キャラが出ます。誰が出るかは楽しみに。

第1話 ボクとアキちゃんと迷子の女の子

「父さん。ちょっとアキくんちに遊びに行ってくる！」

「ああ。余り、アキくんに迷惑かけないようにな。それと、暗くならない内に帰ってくるんだぞ。」

父さんの返事に勢いよく駆け出した。

ボクが風宮家の次男として、転生して5年がたった。その間にアテナさんに頼んだ通りにアキちゃんと友達となり、今ではほとんど毎日公園で泥だらけになるまで遊ぶ仲となっていた。(どちらかが風邪をひいた場合は別。) 今日もアキ君と一緒に公園で泥だらけになるまで遊ぶ予定だった。

公園へ向かう途中で、泣いている女の子を見つけた。事情は良くわからないけど、泣いている女の子をほっておけずにボク達はその女の子に声をかけた。

「どうしたの？」

アキ君が優しく声をかけたらこちらを見た。その顔は、泣き顔だ。ボクの左手を女の子の目の前でひらひらさせる。『何も持っていないよ。』と言うアピールだ。そしてグッと握る。次の瞬間ボクに左手にはバラの花が現れた。

「あげる。君みたいなかわいい女の子には笑っている方がよく似合

「うよ。」

「……………うん。ありがとう。」

まだ目は赤いが、それでも少女に笑顔が戻ったようだ。

「どうしたの？」

「弟とはぐれちゃったの。」

「僕達も探すの手伝うよ。僕はよいいあきひさ、こっちはかざみやこうよう君。君と弟のお名前を教えて。」

「うん！アタシはゆうこ！おとうとはひでよしっていうの！」

ゆうこにひでよしってまさか、原作キャラか！驚いている間にアキ君がゆうちゃんから秀吉君の服装や顔の特徴を聞き出したらしい。

「アキ君とゆうちゃんは向こう側を探して。ボクは向こう側を探してくる。見つからなくても1時間ぐらいしたらボクのお店に集合して。」

「うん！わかった！行こう！ゆうちゃん！」

ボクの声にアキ君がゆうちゃんを連れて行つた。

心の中でアキ君にお礼を言いながら、『地球の本棚』に入る。キーワードは『Hideyoshi kinoshita』、『Whereabouts』、『Map』。思ったより離れていない場所に

いることがわかり、その場所へと向かった。

………すごいなほんとに。パツと見た感じ、いやじっくり見ても
ゆうちゃんと全く変わらないや。………別に一卵性双生児って訳じ
やないから此処まで似ている必要などないんだけどね。

「ねえ。秀吉君で合っているよね？」

「？うむ。そうじゃがおぬしはどちらさまかの？」

突然声をかけられて、秀吉君は警戒しているようだ。

「秀吉君のお姉さんに頼まれて探してたんだ。」

「姉上に？それはわざわざかたじけないの。」

「気にしない気にしない。困っている人を見つけたら助けるのは当然のことでしょ？ボクのうちで待っていていればくるはずだよ。」

そういつてボクは秀吉君をボクのお店に連れて行った。

「あれ？モミジ。お帰り。ずいぶん早かったね。」

夏実母さんがボク達を出迎えてくれた。

「迷子の子を保護しちゃったんだ。後1時間もすればアキ君がこの子のお姉さんを連れてくるよ。」

「ああじゃ、奥に上がってて。お茶とお菓子用意するから。」

奥で夏実母さん達が持ってきてくれたお菓子やお茶を飲みながら、トランプで遊んでいると、やがて、アキ君とゆうちゃんがやってきた。「ひでよし!!」

ゆうちゃんが涙を流しながら秀君を抱きしめる。

「よかった。見つかってよかった。」

「かたじけない姉上。心配かけてしまった。」

美しきかな。姉弟愛。しばらく、二人のやりとりを見つめていたが、四人で暗くなるまで、トランプで遊んだ。

「ありがとう。アキくんにごうくん。…………遊びに来ていい?」

「ウン。もちろんだよ!」

ボクたちは満面の笑顔で答えた。

第2話 ボクと優ちゃんと誘拐事件（前書き）

感想をくださりました、鳴神 ソラ様、光閨雪様、まあ様、GAU様、及び、この小説を呼んでくださりました皆様ありがとうございます。

優子嬢が拉致られます。

結果がどうなるかは本文を見てください。

第2話 ボクと優ちゃんと誘拐事件

優ちゃん達と知り合いになってから数年が経ちボク達は小学校に上がった。住んでる地区の都合で別々の小学校になってしまった。その所為で、涙ぐんだボクを見て優ちゃんが、『そんな顔をしないの。学校が別々だからって放課後が別々にならなきゃいけない訳じゃないんだしね?』と何故か、鼻血を出しながら慰めてくれたのが少し怖かった。学校が終わって、帰り道で、優ちゃん達と合流して、夕方になるまで、遊ぶ時間がすごく楽しかった。あの日もそうだった。

いつものようにアキくんと一緒に優ちゃん達が使う通学路の途中で優ちゃん達を待ってたら、優ちゃんを見つけ、声をかけようとしたら、後ろから追いかけてきた男達が優ちゃんの口をふさいで無理矢理車に押し込んだ。

「モ、モミジ、これって誘拐!」

「…………アキくんはボクの家に行って父さん達に伝えて。ボクはあの車を追いかける。」

アキくんにそう言って駆け出した。

SIDE 優子

怖い！車に押し込まれた時にわかった。アタシは誘拐されたんだと。逃げ出したくても、両脇に男の人に押さえ付けられて、逃げられない。

そんな、恐怖感と無力感の中で助けを待つて震えてた時

『まて！』

そんな声が聞こえた気がした。

「まて！」

今度ははっきり聞こえた。

誘拐犯にも聞こえたようでしきりに辺りを見渡している。

「おい！バックミラーになにか映ってる！」

その言葉にみんなが注目する。確かにバックミラーになにか黒い点映ってる。それが、段々大きくなってる。

「お、おい。ガキが追いかけてる？」

戸惑った声をあげた。あれはモミジ！恐怖感さえ忘れてその少年を見つめていた。

SIDE紅葉

やっと見つけた。車を追いかけて数分、ようやく追いついた。かなり速度をだしてた上、ところどころ曲がって走ってたせいで見失うたびに『地球の本棚』で探して何とか見つけた。

「さて、見つけたはいいけど、どうしよう？」

誰にともなくつぶやいた。車を見つけたはいいけど、どうするか、まったく考えてなかった。止まれと叫んだところで止まるはずがない。どうしようと悩んでたら、男が身を乗り出して、

「うわっ！」

発砲してきた。慌てて、横に跳ぶのが遅れてたら当たってた。そのせいでまた、車との距離が離れてしまった。スピードを出して距離を縮めるがその度に発砲の繰り返しだ。だが、そのいちごっこが突如終わりを告げた。男が銃を向けるのだが、発砲する様子がない。どうやら弾切れみたいだ。そう判断すると一気に距離を詰め、男が身を乗り出していた窓から飛び込んで、優ちゃんを取り押さえている男達を殴って気絶させた。運転手も殴って気絶させてから、ブレーキを踏む。

「もう、大丈夫だよ？優ちゃん。」

車が止まってから、優ちゃんに声をかけると彼女はボクに抱きついて泣き出した。

SIDE 優子

「もう、大丈夫だよ？優ちゃん。」

その言葉を聞いた時、感情が爆発したかのように涙を止める事が出来なかった。怖かった！！誰も助けてくれないと不安で張り裂けそうだった。それ以上に助けてくれたのが嬉しかった。

お巡りさんが来たのを見て、モミジがアタシに聞いてきた。

「……………立てる？」

その言葉にアタシは首を振った。モミジは苦笑してアタシを抱き上げる。ってちよつと待って！これお姫様抱っこ！突然の出来事にアタシの思考は空回りを続ける。心臓だって、かなり早くドキドキ言ってるのが自分でも分かる。この瞬間、嫌でもわかってしまった。アタシはモミジに恋してるんだ。今はまだこの想いを伝える事ができない。でも、いつか伝えてみせる！

「……………アタシがモミジのものになっても構わないからモミジもアタシのになって。」

誰にも聞こえない言葉は自分でも驚くほど大きく響いた。

第2話 ボクと優ちゃんと誘拐事件（後書き）

まず最初に言います。やり過ぎてしまった感じがします。

そして、人と車のカーチェイスは書いて見たかったので満足感もします。

第3話 瑞希ちゃんと秋穂母さんと料理教室（前書き）

感^{かん}想^{そう}く^くだ^ださ^さり^りま^まし^した^た、鳴^{なり}神^{かみ} ソ^そラ^ら様^{さま}、ま^まあ^あ様^{さま}、光^{ひかり}闇^{やみ}雪^{ゆき}様^{さま}、並^{なら}び^びに^にこ^この^の小^{せう}説^{せつ}を^を呼^よん^んで^でく^くだ^ださ^さい^いま^まし^した^た皆^{みな}様^{さま}あ^あり^りが^がと^とう^うご^ござ^ざい^いま^ます^す。
幼^{よう}少^{しょう}期^き編^{へん}は^は今^{いま}話^わで^で終^は了^{りょう}し^しま^ます^す。

第3話 瑞希ちゃんと秋穂母さんと料理教室

「ねえ。瑞希ちゃん。」

瑞希ちゃんとお友達になってしばらくしてから、ある計画を実行する事にした。原作を知ってたら想像つくかもしれないけど、料理兵器撲滅計画。

「はい。なんですか？」

「明日土日だからさ、優ちゃん達も誘って泊まり掛けで料理教室やらない？」

「え？でも……………」

瑞希ちゃんは言い淀む。

「深くは気にしないでね。みんなで料理教室って楽しくならない？」

「はい」

嬉しそうに答えた。

「そうそう。各自調味料だと思うものを持って来てね。」

「ただいま」。

「『『『お邪魔します（するぞい）。』『』『授業が終わってからすぐに食材を大量に買い込み、アキくん達と合流してきた。』

「おかえり〜！」

秋穂母さんがその言葉とともにボクに抱きついてきた。…ボクの家族構成を簡単にせつめ………じゃなくしてお話すると、曾祖父に曾祖母、父に母二人に母親違いの兄という構成で、秋穂母さんがボクを産んでくれた母親である。

「……………ただいま。秋穂母さん。」

頬擦りし始める秋穂母さんに若干、呆れが混じったような声で声をかける。

「こんにちは。秋穂さん。」

アキくんの挨拶に秋穂母さんがアキくん達に気付いたらしい。

「いらっしやい。アキくんに秀くんに優ちゃん。それで、そちらの女の娘が瑞希ちゃんよね？」

「はい。はじめまして。姫路瑞希と言います。」
わざわざ頭を下げて挨拶する瑞希ちゃんだ。

「時間も無いし、さっさと始めよう？それじゃ、みんな。持ってきた調味料を確認させてね。」

確認の結果、アキくんは大丈夫。秀くんにも優ちゃんも大丈夫なん

だけど、やはり、問題は瑞希ちゃんだ。砂糖や塩といった普通に聞いたら真っ先に出て来る物はないわ、多種類の劇薬が出てくるわ。これには、ボクもアキくんも秋穂母さんも戦慄した。

「うーん。これは大変かもね。」

秋穂母さんが唸りながらもそう言った。

「無理そう?」

その言葉に秋穂母さんが首を横に振った。

「大変かもしれないけど、根気よく説明すれば大丈夫だよ。任せて。」

胸を反らして宣言する秋穂母さんに頼もしく感じるのだった。

SIDE 瑞希

今日1日の特訓の成果は良い方だと思う。秀吉君や優子ちゃん料理の腕が上達していると思う。でも、私だけが、大した成長してない。私が持つて来た調味料が危険物だという事がわかったけどそれだけだった。そんな自分に不甲斐なく感じながら御手洗いの帰りにシャッシャッという音が聞こえた。何の音だろう? 音の聞こえた方に行って見ると、秋穂さんが台所でなにかをやっているようだった。

「秋穂さん?」

その言葉に秋穂さんがこちらに振り向いた。

「ごめんね。起こしちゃった？」

「いいえ。大丈夫ですけど、何をしていたんですか？」

「包丁を研いでたんだ。」

「大変じゃないですか？」

私の問いに首を振って否定した。

「ううん。私が作った料理で好きな人達が幸せになるってことはうれしい事だよ。」

秋穂さんの言葉になんとも言いたい事がわかった。そして、私はあるお願いをした。

SIDE紅葉

「……………美味しい。」

瑞希ちゃんの手料理を食べてそう呟いた。おかしい。確かに瑞希ちゃんの手料理は不味くはない。だけど、決して美味しいと評価出来る味じゃない。

「それに……………」

「それに、なんですか？」

ボクの声が聞こえたのか瑞希ちゃんが聞いてきた。

「いや、なんでもないよ。」

その問いに首を振って否定した。気になったのは瑞希ちゃんだ。目の下に隈を浮かべているのに凄く生き生きした表情をしているのだ。そして、もう一人目の下に隈を浮かべている人に質問して見た。

「秋穂母さん。瑞希ちゃんに何かしたの？」

「別に♪料理の基本を教えただけだよ♪」

「料理の基本？」

ボクの疑問を瑞希ちゃんが答えた。

「はい♪料理の基本。それは誰かを想う気持ちです。」

第3 5話 ボクとアキちゃんと女装コンテスト（前書き）

思い付きで急遽書いた外伝です。その為めちゃくちゃなところがあるかもしれませんが。

第3 / 5話 ボクとアキくと女装コンテスト

「今から、コンテストに出てもらう人を決めてください。」

文化祭の事で文化祭実行委員の人が教壇に立ち皆に言った。

「コンテストって事はミスコンですか？」

「それが、ミスコンではなく、ミスターコンテストで、しかも、女装ものです。」

「な！なんじゃ！それは！」

実行委員の言葉に騒然となる。

「ミスコンだと少し問題があるのと、女装ものだと受け狙いにできるからです。誰が出る人いませんか？他者推薦も可能です。」

へー。それじゃ、

「はい！（吉井明久）（風宮紅葉）君が良いと思います！」「」

ボクともう一人が声をあげた。って、アキくん？

「出場者は2名と言われてますから、このお二人に出てもらいましょう。」

実行委員がそう言うのと皆が惜しみ無い拍手をしてくれた。

「……………と言うことがあったんですよ。」

家に泊まりに来たアキくんが夕食時に話し出した。

「アキくんも大変だね。」

「それで。アキくん。どんな衣装が決まってるの？」

「いえ。僕もモミジも決まってるません。」

夏実さんの言葉にそう返したら、夏実さんはボクとアキくんをジロジロと見始めた。

「うーん。メイドは在り来たりだし水着は無理だし。何にしようかな？」

「あ、あの。夏実さん？」

恐る恐る問いかけるが聞こえて無いみたい。

「ウサギさん。レースクイーン。シスター。巫女さん。素材が良いからどんな格好にしようか悩むな。」

「あの夏実ちゃん。着物はどう？」

秋穂さんの言葉に何が気付いたようだ。

「ん。ああ！それがあつた！ありがとう」秋穂

「エヘヘ」夏実ちゃんのお役に立てて何よりだよ

……そして、文化祭同日つまり、僕達の恥辱ショー当日。コンテストは大にぎわいだった。女装姿の男子達がステージに上がる姿は観客は笑っていたけど次は自分達の番だと思つと笑う気にもなれない。やがて僕の番になりステージに上がるとみんなが静かになった。

「キヤー」アキちゃん「こっち向いてー」

秋穂さんの黄色い応援に力なく片手を降つて答えた。次にモミジの番になり、ステージに上がる。

「カッコイイ」モミジ

モミジの場合は夏実さんのおかげかなれたかのように片手を振つて応えた。

出場者全員がステージに上がり、表彰される。3位の人が表彰され、2位の人がの番だ。

「2位は吉井明久君です。」

余り、嬉しくない。そう思いながら、上がろうとすると、手裏剣が飛んできた。驚いて転びそうになると、

キンツという金属音と

「大丈夫ですか！姫様！」

と若干焦って助けてくれた袖無しの黒い和服を着たくノ一のモミジがいた。

「うん。ありがとう。」

と返事を返したら、みんなから黄色い悲鳴をあげられた。

……………その日から、僕はアキ姫と、モミジは男子からのラブレターを渡される日々が続いてしまった。

第4話 アキくんと島田さんと知らない日本語（前書き）

感想くださりました、鳴神 ソラ様、光闇雪様、まあ様、LAN武様、レフェル様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。

なお、活動報告にも、書きましたが、同タイトルを発見した為、タイトルを変更致します。協力してくださりました、鳴神 ソラ様、GAU様、コメントをくださりました、まあ様ありがとうございます。

第4話 アキくと島田さんと知らない日本語

「アキくん。退屈で寝そうだった。」

余りに退屈だった入学式が終わりアキくんには愚痴りながらこれから1年間お世話になる教室へと移動する。

「須川亮です。よろしくお願いします。」

亮君が自己紹介を終えて席についた。あ。次は島田さんの番だ。

「シマダ ミナミ です。よろしく お願いします。」

ボク以外のみんながびっくりしている。黒板の字間違ってるし。

「島田さんはドイツからの帰国子女で、日本に帰って来たのはつい最近です。」

その言葉にみんなが納得する。……そろそろ、助け船を出さなきゃ。

「（島田さん。黒板の名前が間違ってるよ。）」

ボクがドイツ語で話しかけると島田さんはすごく驚いてから黒板の字を見て、アルファベットに書き直した。

「よろしくお願いします。」

島田さんは顔を赤くして、自分の席に早足で戻った。

「神無月中学校出身、坂本雄二だ。」

坂本君が愛想の無いぶつきらぼうな自己紹介をした。

「あいつが、神無月の悪鬼羅刹。」

坂本君。君は中学時代、一体何を？

「ワシは木下秀吉じゃ。違うクラスに姉上がおるので出来れば秀吉と読んで欲しいのじゃ。よろしく頼むぞい。」

次は秀くん。相変わらず男子の制服に違和感があるね。

「……………土屋康太。趣味はとうさ……………何もない。特技はとうちよ……………特にない。」

土屋君ポケットからボイスレコーダーとカメラが見えてる。それと、土屋君盗撮と盗聴は犯罪だよ？

あ。次はボクの番だ。

「風宮紅葉です。ワザと間違えている人もいますがボクと秀くんは男です。」

ボクがそう言った途端、

「……………バカなアアア……………」

アキくんと秀くんと雄二君意外の男子の叫びがこだました。

え、えつと、なんでそこでみんなが驚くんだらうか？

「ウソだろ？こんなに可愛い娘達が男だなんて。」

ちよつと？

「俺なんて、放課後に告白しようと思ったんだぞ。」

ちよつと待って！ボクは男だよ！！

「ふ。まだ甘いな。」

「キサマ！わかるか一目惚れで初恋なんだぞ！」

え、えつと、そこまでヒートアップしなくても良いんじゃないの？

「お前らあの娘達を見ろ！！！！首から下を女の子と取り替えても違和感無いだろ！！！！あの娘達は男のむすめ、男の娘だ！！！！どうだ！告白しても問題あるか！」

「「あるから（のじゃ）！！おいに問題あるから（のじゃ）！！！！！！」」

ボクと秀くんのツッコミはヒートアップした皆には届かなかった。

「君達。静かにして。自己紹介が進まない。」

鉄人先生の注意で静まり返る。

「長月中学出身の吉井明久です。よろしくお願いします。」

そう言って、頭を下げるアキくんをみんなは見つめるのだった。服装が玲お姉ちゃんの中学の制服だもんね。……あ。島田さんが頭を抱えている。やっぱり、このみんなと一年過ごすのが不安になったんだろう。

入学式とHRが終わり、その日は解散のため、もう帰ろうとしたのだがふと、ある事を思い出した。島田さんが皆を豚呼ばわりするんだった。まだ、日本語が不慣れな状況で孤立するのも可哀想だしね。そう思って、口を開きかけた島田さんに妨害した。

「皆静かにして。」

ドイツ語日本語両方で言って島田さん達を静かにさせる。

「みんな！島田さんは日本語に慣れてないんだから一度に喋らないでよ！」そう言って、一人一人の質問を訳して島田さんの答えを訳す。そんなことをやってたらかなり時間がたってたらしい。

「（あの、ありがとう。）」

「（気にしないで。日本語に慣れてない間はボクもフォローするから、できるだけ早く日本語に慣れてね。）」

SIDE 美波

「はあ。」ため息を吐きながら一人とぼとぼと歩いていた。学校ではカザミヤや他の皆がサポートしてくれるけど、一人の時は買物だってまともに出来ない。そんな自己嫌悪の中

「（アレ？どうしたの？島田さん。）」

見知らぬ女性に声をかけられた。？どこかで見たような？

「（あれ？あなた誰？）」

「（わからない？風宮だけど。）」

その言葉に彼女をじろじろと見た。確かにカザミヤだ。

「（どうしたのその格好？）」

「（ここ、父さんのお店だからかえってから手伝ってるんだよ。）」
たしかに私たちが話をしている建物は何かのお店だ。

「（そうだ！島田さん。今、時間ある？）」

そう言って、奥に上がらせる。奥の部屋でヨシイが何かを聞きながら書き写している。

「（ヨシイは何をしているの？）」

「（アキくんはドイツ語の勉強しているよ。）」

え？その言葉を聞いて驚いた表情で彼女の顔を見た。

「（アキくんは島田さんと友達になりたくて必死にドイツ語の勉強しているよ。）」

その言葉に私は目頭から熱いものがあふれるのを止められ無かった。ここは二ホンだから二ホンゴを使うのが普通だ。わざわざ、ドイツ語を覚えようとする必要なんて無いはず。なのに、私の為にそんな苦勞を裂いてくれた事が嬉しかった。

「（カザミヤ。私はもう帰るけど、この辺の図書館ってまだ開いてる？）」「

「ヨシイ。」

廊下を歩いていると、ヨシイとカザミヤが居るので声をかけた。

「（島田さん。おはよう。）」「

まだ、片言だけど、ドイツ語でヨシイは挨拶した。

「あのね、ヨシイ、ワタシは、」

「え Wat a sit? ゴメン。何か怒らせちゃった?」

「チガいます! ワタシは」

そこまで言いかけて言い直す事にした。

「あのね、ヨシイ。ウチは、アナタとオホモダチになりたいです。」

ずっこけた二人にその言葉の意味を教えてくださいなうのだった。

第5話 アキ君と葉月ちゃんとぬいぐるみ（前書き）

感^{かん}想^{こう}く^くだ^ださ^さり^りま^まし^した^た、鳴^{なり}神^{かみ} ソ^そラ^ら様^{さま}、L^えA^いN^な武^ぶ様^{さま}、ま^まあ^あ様^{さま}、暮^く灘^な雪^せ夜^や様^{さま}、並^なび^びに^にこ^この^の小^{せう}説^{せつ}を^を呼^よん^んで^でく^くだ^ださ^さい^いま^まし^した^た皆^{みな}様^{さま}あ^あり^りが^がと^とう^うご^ござ^ざい^いま^ます^す。

第5話 アキ君と葉月ちゃんとぬいぐるみ

バカテスト

問・（ ）内に当てはまる人物を答えなさい。

楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業の発展を促したのは（ ）である。

〔姫路瑞希の答え〕

織田信長

〔教師のコメント〕

正解です。

〔吉井明久の答え〕

織田上総介信長

〔教師のコメント〕

君の名前を見た時、×をつけようとした自分を許してください。

〔風宮紅葉の答え〕

第六天魔王

〔教師のコメント〕

本人はそう呼んでたらしいですが、テストの問題にそれを書くのはどうかと。

〔木下秀吉、木下優子の答え〕

尾張の大虚け

「教師のコメント」

……今すぐに本人に謝罪してください。

「島田美波の答え」

ちゃんまげ

「教師のコメント」

島田さんが日本語に慣れたのか、些か不安になります。

「全員動くな！」

鉄人先生の一喝で全員が動くのをやめた。

「いいか！カバンを開けて机の上に置け！」

鉄人先生はそう言ってから持ち物点検を開始した。大抵の生徒は軽くカバンを覗くだけだけど、

「坂本。お前はポケットの中を見せろ。」

「チツ。」

軽く舌打ちしながらポケットの中身を見せる。生徒に応じてチエツクを厳しくするのは良いの？

「次はお前の番だ。吉井明久。」

今度はアキくんの番か。

「お前はここでジャージに着替えろ。」

……………いくらなんでもそれは酷いと思う。

「あの、先生。女子の前で着替えるのはちょっと……………」

「ダメだ。お前はズボンの中にまで隠しかねん。今ここでジャージに着替えろ。……………風宮。お前は携帯を出して何する気だ？」

鉄人先生の言葉を無視して、通話ボタンを押すフリをする。

「もしもし、警察ですか？公衆の面前で生徒にセクハラさせようとする変態教師がいるので来てください。」

「ちょっと待て！わかった！吉井を男子更衣室で着替えさせるからそれは勘弁してくれ！」

必死でボクを説得しようとする鉄人先生に肩をすくめて携帯をしまった。

「小説にゲーム機にDVD。お前は学校をなんだと思っているんだ？」

若干疲れた表情でアキくんの没収した品を袋に積めていく。

「持ち物検査に時間をくったのでHRは省略する。1時間目はいいよ召喚実習だ。全員体操服に着替えて体育館に集合。」

没収した品を抱えて鉄人先生が教室を出た。

『サモン試獣召喚!!』

瑞希ちゃんと対戦相手が同時に言い、召喚獣が姿を現した。瑞希ちゃんをデフォルメされた可愛い姿だが、その両手に持って両刃の大剣が凶悪だが、点数によって左右されるため、こればかりはどうしようもない。

パシャパシャと写真を撮りまくる康君に疑問を覚えたのか、アキ君が問いかける。

「アレ？ムツツリーニカメラ没収されなかったんだ？」

「ああ。康くんは順番アキくんの後でしょ？だから、更衣室に言ってる間に見られちゃマズイ物は点検を済ませた人に預かってたんだ。」

「ふーん。後で、瑞希ちゃんの写真を焼き増ししてよ。」

「……………（コクリ）……………代金はいらない。」

康くんとアキくんの商談が成立した時、

「吉井明久！島田美波！前に出る！」

お。次はアキくんと美波ちゃんの番だ。

「お。お前の番だぞ。明久。がんばって来いよ。『観察処分者候補』?」

「あのね、それは雄二の方でしょ？僕はそんなに問題行為をした覚えがないよ！」

「……………」

「え？モミジ何気まずそうに目をそらすの!!」

「ゴメン。どう考えてもアキくんの方が『観察処分者候補』だと思う。」

「ヒドイ！モミジは僕の味方だと思ってたのに裏切ったの!？」

ボクにくっつかかるアキくん に ジト目で応じた。

「……………ボクが何を言っても勉強に意欲を示さない人に何て言っても方をしると?」

「うつ。」

その言葉にアキくんは言葉に詰まる。

「吉井明久！早く前に出る！」

鉄人先生の言葉に慌てて前に出た。

「あ。吉井が相手だったんだ。嬉しいな」

美波ちゃんが嬉しそうに言った。美波ちゃんアキ君が本当に好きなんだね。

「吉井を殴るの気持ちいいもんね。」

美波ちゃん。殴り合うのは召喚獣だよ。

「あのね、島田さん。僕らが殴り合う訳じゃなくてね。」

「あ。そうよね。ウチらが殴り合わないのよね。」

アキ君の言葉でやっと自分の間違いに気づいたらしい。

「ウチが一方的に殴るのよね。」

………美波ちゃん。それも違うよ！

「あの、先生。校内暴力ですよ？持ち物検査をしているヒマがありましたらイジメを何とかしてください。」

「………島田。誰であろうと暴力は良くない。」

「でも、先生。」

「でもない。イジメはダメだ。」

「………はい。」

ようやくわかってくれたか。

「そうか。わかってくれたか。それなら　今回は特別だからな。」

あれ？校内暴力が容認されたような？

「はい！頑張ります！」

「うん。二人のお仕置きを頑張るから。」

ボクがそう言っ
て美波ちゃんの襟首を、鉄人先生の髪の毛をひつつかむ。

「やっと、終わったよ。」

授業が終わり、いつものメンバーで下校する事になった。

「……………そう言えば、みんなは何か没収されたの？」

「俺は最新のMPをな。クソ。最新の曲が入ってたのに。」

「ワシはないの。明久のおかげでな。」

嬉しそうに笑みを浮かべて言う。

「せっかく今日は召喚実習だけで授業がないと思ったのに。」

「アキ君は勉強嫌いだもんね。」

「召喚実習か……………」

ふと雄二君がぼつりとつぶやいた。

「そうしたの、雄二。」

「いや来年俺たちが試験召喚戦争をやる年になれるなと思ってな。」

「でも、どうして、試験召喚戦争なんてやるのかな？点数の競い合
いなら、試験の点数を張り出せばいいのに。」

「たぶん、『モチベーションの上昇』と、『チームワークの向上』
でしょ？」

アキ君の疑問に優ちゃんが説明していたとき、

「まったく、吉井ってば。ウチに掃除を押しつけてどこに隠れてる
んだか。」

そんな声が廊下から聞こえてきた。

「明久って掃除当番だったの？」

「うん。同じ班の島田さんに任せて逃げて来ちゃった。」

「でも、友達に押しつけるのは良くないよ？ちゃんとあやま…………。」

「もう！見つけたら、手足を縛って3階から突き落としてやるんだ」

から！」

それはスタントマンの蒼白物のビックリアクションだよ！

「謝る前に速く逃げて！！」

「言われなくても！！」

ボクの言葉に慌てて逃げ出す。

「あ！見つけた！ちょっと待ちなさい！」

「待たない！殺されるから！」

「怒ってないから待ちなさい！」

それ絶対嘘だと思う。

「……………美波ちゃん？」

ボクのささやきにビクンとふるえた。

「確かに、掃除当番を押しつけたアキ君も悪いけど、アレはないんじゃない？手足を縛って3階から突き落とす？美波ちゃんはアキ君を殺す気？」

ボクの言葉に美波ちゃんは目を泳がせる。

「……………お仕置きだよ。」

もう一度、美波ちゃんの前首を引っ張っていった。

「……………没収品を取り返したいだろ？」

「うん。そう。」

美波ちゃんにお仕置きしている間にアキ君は先に帰ってしまった。
で、その翌朝みんなの所に集まって開口一番でそう言ったのだ。

「……………理由は？」

「ゴメン。言えない。」

アキ君のその返答に軽いため息を吐いた。

「……………話にならないな。だいたいメリットが少ない代わりにデメリットが大きい。」

「アキ君。その没収品を取り返す事に重要な意味があるの？」

ボクの問いにアキ君は頷いた。

「……………わかった。ただし、事が済んだらボク達に教えて。……………
みんなもそれで良いでしょ？」

その問いにみんなが頷いた。

「じゃ、アキ君。ワザと鉄人に没収させるから、携帯のマナーモードを切つて。」

ボクのお願いにアキ君は携帯のマナーモードを解除した。

その後は、原作の通り、出席確認の時に、アキ君の携帯を鳴らさせて、康君に後をつけさせた。

「場所は分かったけど、鍵が掛かっている。」

「あ。それならボクにまつかせなさ〜い」

指を軽く振って引き受けた。

放課後になってみんなで職員室に来た。

「じゃ、ボクがロッカーを開けるから、みんなは先生達の注意を別の方に引きつけて。」

「では、ワシが先に入って体調不良を装うから、モミジはスキを見て入ってくれんかの？」

そう言つて秀君が入ってしばらくしてから、先生達に支えられて秀君が出てきた。そのスキにボクとアキ君は中に入った。ロッカーを引いてみて鍵が掛かっている事を確認してから、髪に隠したヘアピンを抜いて鍵穴に差し込む。カチャカチャする事数秒、キンという音がして、鍵が外れた。

「お。綺麗にしてある。意外だ。」

確かに、ロッカーは整理されていて没収品は分かりやすい位置に置いてあった。没収袋を肩に担ぎ、ロッカーの上に縛られておいてあった、古本も持って大急ぎで職員室を後にした。

そして、翌朝盗難がバレてボク達が『観察処分者』に認定されてしまった。

「…そういった事情でお金が欲しかったら僕に言えば少しぐらい貸したのに。」

その言葉にハッと気づいた表情になった。

「え？じゃ、もしかして僕がやったことって……………」

「ただのムダじゃな。」

シクシクと涙を流すアキ君に軽く頭を撫でるのだった。

第6話 優ちゃんと秀くんと振り分け試験（前書き）

感謝くださりました、鳴神 ソラ様、LAN武様、まあ様、光闇雪様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。

第6話 優ちゃんと秀くんと振り分け試験

SIDE 優子

………つまらない。テストを解きながらそう思った。全く解らないからじゃない。アタシが頑張れば頑張るほどアイツが通う事になる教室の距離が広がるからだ。

『行けなくなっちゃった。みんなはがんばって。』

さして残念そうには見えない笑顔で笑う彼の顔を思い出す。

ガタン！

「瑞希ちゃん！」

なにかが倒れる音に続いて明久の声が聞こえた。驚いて、振り返って見ると、瑞希が倒れていて、明久が心配そうにところだった。朝から瑞希の具合が悪そうだった。

「吉井君。席に戻りなさい。」

「ですが、友達を見捨てることはできません。」

「姫路さん。途中退席は0点扱いになります。」

「先生！具合が悪いくらいで0点はいくらなんでも酷すぎます！」

「吉井君は静かにしてください。姫路さん。どうしますか？」

「……………はい。」

「……………じゃ、行こう。瑞希ちゃん。」

その言葉に試験官が慌てた。

「な！待ちなさい！吉井君！」

「悪いですけど先生みたいな人に試験監督されたく有りません！」

そう言つて明久は瑞希を連れて行つてしまった。……………もう明久も瑞希もテストを受ける事は出来ない。

『いかなる理由があろうとも、途中退席は0点扱いとなる。』がある以上、明久達が試験を受ける事も出来ない。秀吉もこちらを見た。……………チラリと視線を秀吉に向ける。秀吉もこちらを見た。それだけで、弟が何を言いたいか、手に取るように分かつてしまった。

SIDE 秀吉

ガタン！

「瑞希ちゃん！」

なにかが倒れる音に続いて明久の声が聞こえたのじゃ。振り返つて見ると、瑞希が倒れていて、明久が心配そうにそばにいたのじゃが、その後の流れで明久は瑞希を連れて行つてしまったのじゃ。明久がこの試験の為にどれだけ一生懸命に勉強してきたかを知つておる。それなのに全部ムダにしてもうた。みなが愚かをつけたくなる程の優しさ。それが明久の長所であり短所でもある。そして、ワ

シが明久を大好きな理由でもある。l i k e 友情などではなくl o v e 愛情のほうじゃ。ふと、姉上の方を見る。姉上もこちらに視線を向けていた。そして、倒れた演技をする姉上を保健室まで連れて行った。

第7話 ボクとアキくん達と試験結果（前書き）

感^ん想^くだ^さり^まし^た、鳴^な神^{しん} ソ^そラ^ら様^様、光^ひ闇^く雪^{ゆき} 様^様、L A N武^ぶ様^様、並^なび^びに^にこ^この^の小^{せう}説^{せつ}を^を呼^よん^んで^でく^くだ^ださ^いま^した^た皆^{みな}様^様あ^りが^とう^ござ^いま^す。

や^やっ^っと^と原^{げん}作^{さく}開^{かい}始^しで^す。

そ^それ^れと^と、今^{いま}回^{かい}、ワ^わザ^ざと^との^の誤^ご字^じあ^あり^ます。

第7話 ボクとアキくん達と試験結果

バカテスト

問・以下の問いに答えなさい。

調理のために火をかける鍋に製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。
この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。

〔姫路瑞希の答え〕

問題点

マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため、危険であるという点

合金の例

ジュラルミンと言いたいですが、料理するたびに腐食しますので、ステンレス

〔教師のコメント〕

正解です。合金なので『鉄』では駄目というひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

〔土屋康太の答え〕

問題点

ガス代を払っていなかったこと

〔教師のコメント〕
そこは問題じゃありません。

〔吉井明久の答え〕
問題点

昔見たテレビ通りでしたら、マグネシウムを空气中で燃やすと、激しく発光してきわめて危険です。

合金の例

ジュラルミン

〔教師のコメント〕

正解かどうかはともかく、もっと自信を持ってください。そして、吉井君。去年と比べて成長しましたね。

〔風宮紅葉の答え〕

問題点

酸化マグネシウムの生成の際、激しく発光してしまう。その際、水をかけると、余計大惨事になる。

合金の例 オレイカルコス

〔教師のコメント〕

テストに伝説の合金を持ち出さないでください。そんな事するのは君ぐらい……

〔木下優子、木下秀吉の答え〕

問題点

マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため、危険である合金の例 ヒヒイロカネ

〔教師のコメント〕

と思いました、まさか君たちもするとは思いませんでした。し

かし、一字一句違えないとは、さすが姉弟ですね。

ブンブンと天狼を素振りする音で目を覚ました。時計でまだ6時になっていない事を確認して、朝食を作る。朝食は焼いた鮭とご飯とおみそ汁。

出来たので父さん達を起こして、食べてからアキ君の家へと向かう。

アキ君の家の呼び鈴を鳴らしてみるが、何の反応も無い。仕方ないので鍵を取り出して開ける。何故鍵を持っているかというと、明信さん、アキ君のお父さんに世話するように（とくに金銭面）頼まれたのだ。どうやら、アキ君にお金を渡しておく、ゲームにつき込むと考えたらしい。実際にそれは正しい。試しに一週間の食費を渡してみたら一日でゲーム代に消えてしまった。

アキ君の部屋に行ってみるとやっぱりまだ寝ている。

「……………おい。アキ君。起きろ。」

そう言っても効果がない。それどころか

「うーん後おゝ2万光年。」

と寝ぼけた声でそう返答を返した。オマケに光年は時間じゃなくて、距離だし。……………仕方ない。軽くため息をついて冷蔵庫からある物を取り出す。

「アキ君。早く起きないと冬美お婆ちゃんの手作りジュースをプレゼントするよ?」

「起きた！起きたからそれはやめて！」

ボクの囁きにアキ君は慌てて起き上がる。

「おはよ。アキ君。」

「おはよじゃないよ！それは止めてっていつも言ってるじゃん！」

「何言ってるんだよ？最初は揺すってあげたのに起きない方が問題じゃないか？」

ボクの反論にアキ君は何も言えなかったらしい。

「早く着替えなよ。朝ご飯はボクが作るから。」

ひらひらとサクラ舞う道を眺めながら、今日からふみつきがくえん文月学園の2年生だと、感慨深くいつものみんなで歩いていると、校門に仁王立ちしている鉄人先生に気づいて声をかけた。

「てつ………西村先生。おはようございます。」

「「西村先生おはようございます。」」

「西村先生おはようなのじゃ。」

「二十八号先生。おはようございます。」

「吉井。お前は鉄人と言いかけなかったか？」

「気のせいですよ。」

「ん？そうか？」

ジロリとにらみながら問いかけてきた。

「そして、風宮。俺の名前は西村 宗一であって二十八号ではない。」

「ええ！鉄人のフルネームって鉄人 二十八号じゃなかったの！！」

「お前は新田でも知っている事も知らんのか！？

……………まあいいほら。」

やや憑かれたような表情で自分達の名前の書かれている封筒を差し出す。まあ、ボクは開けなくても分かっているので、鞆の中にしまう。

「風宮。残念だったな。」

「こついうのも時の運ですし、仕方ないですよ。」

……………実は、振り分け試験の前日に、冬美お婆ちゃんに無理矢理稽古をつけさせられたのだ。そして、その結果、両手両足肋骨3本骨折、全身打撲の全治2週間の重傷だったのだ。お医者さんもよくコレで生きてたと呆れられたんだよね。

アキ君達が封筒を破ったので見て見ると、Fと書かれていた。

「アレ？みんなFクラスなの？なんで？」

思わず問いかけた。みんなの学力なら、Aクラスに行けるだろうし、と首をかしげていると、瑞希ちゃんから答えてくれた。

「試験中に熱を出しちゃいました。」

「で、その瑞希ちゃんを保険室まで連れて行って0点。」

「で、アタシは体調不良で倒れたの。」

「そして、ワシはその姉上を保健室まで連れていくために退室したのじゃ。」

「姫路と吉井はともかく木下姉弟はワザとだろ？1つの教室で2人の人間が体調を崩すなど考えにくいからな。」

ジロリと2人を見ながら問いかけた。

「もう過ぎた事ですししょうがないですよ。」

「そうじゃのう。」

「まあ。2人の気持ちは分かるがな。」

その一言に2人の顔は紅くなる。ああ。そう言う事か。アキ君を追いかけてFクラスに来たのか。

「まあ、わざわざFクラスに来たんだ。持つべき物は友情だよな。ありがとう。」

その言葉に何故か優ちゃんにため息を吐かれてしまった。意味が分からず、首をかしげていると

「まあ、いい。以後気をつけるように。それと、吉井。俺個人の意見だが、振り分け試験の時お前の行動は正しい。お前が俺の教え子だった事を俺は誇りに思う。」

「『はい!』」

西村先生の言葉に3人は力強く返事をする。

「分かったなら行け。」

3人の返事に微笑を浮かべていった。

Trick or Treat（お菓子頂戴。じやなきやイタズラするよ。）

ワイト「（本日がハロウィンというわけで前書き、あとがきに私達が出ることになりました。感想くださりました、鳴神 ソラ様、光 闇雪 様、LAN武様、まあ様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。）」

ワイトメア「（このお話が読んでくださる皆様の楽しみになれば幸いです。では、本編をどうぞ。）」

Trick or Treat（お菓子頂戴。じゃなきゃイタズラするよ。）

SIDE 翔子

「……………？雄二？」

私が雄二と一緒に帰りたくてFクラスに来た時、雄二は寝ていた。私が入って来たのに起きる気配はない。熟睡しているらしい。

「…雄二。起きて。」

声をかけたり、揺すってみても、起きようもしない。仕方ないので、起きるまで待っていたのだが、ふとしたイタズラを思いついた。『あること』をしてから雄二の耳元で囁いた。

「…雄二。」

Trick or Treat（お菓子頂戴。じゃなきゃイタズラするよ。）
「…」

「ん……………」

「…残念。Trick。」

そう言ってから雄二に近づいて……………。

「ん…………。」

目を開けた視界に翔子が映る。それは、いいんだが、何故顔が紅い？

「翔子。どうした？」

「なんでもない。雄二。一緒に帰ろう。」

気にはなるがまあいいか。翔子と一緒に教室を出ると、明久と風宮に出会った。

その2人は俺を見るとニヤニヤと笑っていた。

「どうした？」

「イヤ。何でもないよ？ただ、大胆だね。雄二？」

俺の問いにますます笑みを強くして言った。

「雄二君。コレだよ。」

と言って頬の写真を見せた。って何！

「翔子！」

頬に口紅がついてた。ちくしょう！こんなものを新田達に見られたら、

「風宮さんどうしたんですか？」

ちようどそこに新田がいた。一通り俺達を見て、視線が俺の頬にとまる。

「緊急召集！」

その叫びにFFF団が集合する。慌てて、この場から離脱する。

「者共！坂本を追え！！！！異端者だ！！！！！」

ちくしょう！捕まっただまるか！！

「不幸だぁーっ！！！！！」

俺の叫びが文月学園に木霊した。

Trick or Treat（お菓子頂戴。じやなきやイタズラするよ。）

ワイト婦人「（ハロウィンとは魔女やお化けの仮装して、お菓子をもらう行事じゃ。）」

ワイトキング「（ヨーロッパが起源の民族行事のようじゃ。簡単に言えば、日本のお盆のようなものじゃ。死者の魂とともに魔物までやってくるらしいから、それから、守るために魔物の姿をするようになったらしいのう。）」

ワイトメア「（では、皆様で、）」

骨ズ「（Trick or Treat（お菓子頂戴。じやないとイタズラするよ）！！）」

Trick or Treat ZWEI（お菓子頂戴。じゃなきゃイタズラす

ワイトメア」（新話を投稿致します。このお話は紅葉君のご両親のお話でございます。

え？ハロウインは終わりじゃないの？残念ながら、それは違います。）」

ワイト」（感想くださりました、LAN武様、鳴神 ソラ様、光闇雪 様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。

今話が皆様の楽しみになれば幸いです。）」

Trick or Treat ZWEI（お菓子頂戴。じゃなきゃイタズラす

Side 忍

縁側に座ってお菓子を食べているところで、

「お兄ちゃーん」

と声を上げながら、秋穂が突撃してきた。その衣装は、いつもの、着物姿ではなく、かわいらしい魔女のものだった。

「夏実ちゃんに作ってもらったんだ」似合っでしょ？」

そのすぐ後ろで秋穂とパールツクの夏実がやってきた。

「いくよ。夏実ちゃん」せーの」

「Trick or Treat（お菓子頂戴。じゃなきゃいたずらしちゃうよ。）」

二人が声をそろえて手を差し出した。……ああ。そうか。今日はハロウィンだっけ。だけど、ここは和菓子屋だからいくらでも、お菓子はあるんだが。あ、そうだ。ふと、思いついたことがあり、口の中に、和菓子を運び、良く噛む。そして、夏実の手を取り、こちらに引き寄せる。

「キヤッ」

その夏実は嫌がるそぶりを見せず、むしろ、嬉々とした表情で、こちらに近づく。そして、そのかわいらしい唇を重ねた。

「ん（ハート）んう…ん…（ハート）」

その、口の中に和菓子を流し込んでゆく。

しばらくしてから夏実の唇を放す。その眼はトロンとして上気していた。

「夏実。Treat《お菓子》はおいしかった？」

「…うん。甘くて、忍の味がして、とても美味しい。」

その横で、秋穂がふくれっ面をしている。しかし、すぐに笑みを浮かべる。

「私はもらってないから、^{イタズラ}Trickする」

そう言うてから、ボクのお菓子を手にとって、口の中でよく噛んで、口移しで、ボクの口の中に流し込んだ。お菓子を流し終えてから、ボクの唇を解放する。

「エヘヘ」^{イタズラ}私のTrickは美味しかった？」

「ウン」甘くて、秋穂の味がして美味しい。」

S i d e ? ? ?

(開店前に何Loveってるの!!)

3人の雰囲気を見て、叫びたいがそれができない従業員一同だった。

Trick or Treat ZWEI（お菓子頂戴。じゃなきやイタズラす

ワイト婦人」（ハロウィンとは10月31日から11月2日じゃ。）

「

ワイトキング」（10月31日は前夜祭。つまりハロウィンイブの
ようなものらしいのう。）「

ワイト」（では、皆様でいい）「

骨ズ」（Trick or Treat（お菓子を頂戴。じゃなき
やから、イタズラするよ。）！！）「

Trick or Treat DRY（お菓子頂戴。じやなきやイタズラすぞ

ワイト」（感想くださりました、鳴神 ソラ様、LAN武様、光闇
雪様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。
います。）「

ワイトメア」（今回も甘いです。おそらくブラックコーヒーも用意
した方がよろしいかと思っています。）「

Trick or Treat DRY（お菓子頂戴。じゃなきゃイタズラすぞ

SIDE 伸二

「冬美。」

縁側に座つてくつろいでいる妻に声をかける。彼女はこちらに振り向いてから、可愛らしく首を傾げて問いかけてきた。

「伸二。どうしたんだい？その格好は？」

上から下までカボチャのお化けの衣装を眺めてた。

「そんなことより、冬美。」

Trick or Treat（お菓子頂戴。でないとイタズラするよ。）

その言葉にハッと気付いたらしい。

「そういえば、今日はハロウィンだっけ？でも、急に言われても、なにもないよ？」

「残念。^{イタズラ}Trickで。」

宣言して、冬美を抱き上げる。

「キャツ」

冬美は抵抗どころか、嫌がるそぶりを見せず、されるがままになつていた。

「ん（ハート）」

ボクの唇は冬美の唇を塞いでいた。そして、その口の中にあつた飴玉を冬美の口内に押し込んだ。しばらく、その飴玉を楽しんでから、ボクの口の中に返してくれた。飴玉をキャッチボールをしていたが、飴玉が溶け、無くなったので、その唇を解放した。冬美はボクに抱きついて、その耳元で囁いた。

「しんじい。アタシにも1つ出せるお菓子があつた。」

そう言うってから、今度は冬美がボクの唇を塞いだ。

「アタシを食べて。」

耳元での囁きにボクは満面の笑みで答えた。

「これは、すごく美味しいTreatだね。」

そう返してから、冬美を抱き上げて、ボク達の寝室へと向かった。

S i d e ? ? ?

（１００歳超して何やってるんだ？）

（と言うか、ボク達に年下のお爺ちゃんかお婆ちゃんが出来るんだね？）

と２人のやり取りを見ていた、曾孫がいたという。

Trick or Treat DRY（お菓子頂戴。じやなきやイタズラする

ワイト婦人「（ハロウィン、カボチャが多く出るようじゃ。そのなかでカボチャのお化けはジャック・オーランタンというものじゃ。）

「

ワイトキング「（カボチャの中身をくり抜き、怖い顔に彫り込むわけじゃが、この顔は魔物達に怖がらせて近づけなくさせるためのものらしいのじゃ。）

「

王&婦人「（さて、いくのじゃ。せーの）」

骨ズ「（Trick or Treat!!）（お菓子頂戴!じやないと、イタズラするよ。）

「

第8話 ボクとアキちゃんとFクラス（前書き）

巨大ホワイト「感想くださりました、LAN武様、鳴神 ソラ様、光闇雪様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。」

巨大ホワイト「（今話も楽しみになれば幸いです。）」

第8話 ボクとアキちゃんとFクラス

バカテスト

問・以下の意味の諺を答えなさい。

- (1) 得意な事でも失敗してしまう。
- (2) 悪いことにさらに悪いことが重なってしまう。

〔姫路瑞希の答え〕

- (1) 河童の川流れ。
- (2) 泣きつ面に蜂。

〔教師のコメント〕
正解です。

〔土屋康太の答え〕

- (1) 弘法の川流れ。

〔教師のコメント〕
シュールな光景ですね。

〔吉井明久の答え〕

- (1) 泣きつ面に蜂。
- (2) 猿も木から落ちる。

〔教師のコメント〕

惜しいです。一応正解ですし三角にしておきます。

〔風宮紅葉の答え〕

(1) 猿も木から落ちる。

(2) 痛む上に塩を塗る。

「教師のコメント」

それも、正解です。

「うわあ。」

「凄いのう。」

秀くんの言葉にボク達は何も言えずにいた。Aクラスの豪勢さのせいだ。教室の広さは50人入ってもお釣りがでるほど。天井は総ガラス張りでスイッチ一つで開閉可能。黒板はプラズマディスプレイ。各自に支給されるものはノートパソコンにリクライニングシートに個人冷蔵庫という学生に支給するには明らかに過剰な代物だ。

「…………おはよう。」

後ろから、聞き慣れた声をかけられそちらを見ると、案の定、霧島翔子ちゃんだった。

「おはよう、翔子ちゃん。」

「おはよう。霧島さん。」

「霧島。おはようなのじゃ。」

「霧島さん。おはようございます。」

みんな元気よく挨拶する。この場にいるみんなは雄二君から紹介されたので既に顔見知りである。

「……………入らないの？」

ボク達の挨拶に翔子ちゃんは物静かに問いかけた。

「ああ。ボク達これなかったり、途中欠場とかで、0点なんだ。」

「……………そう残念。」

シュンとうつぶむいて残念がる。

「でも、何時でもFクラスに来てよ。ボク達は何時でも歓迎するからね。みんな？」

ボクの問いにみんなは満面な笑顔で頷いた。

「……………みんなありがとう。」

翔子ちゃんは優しく微笑んだ。

「うわあ。」

「凄いのう。」

秀くんの言葉にボク達は何も言えずにいた。Fクラスの設備の酷さのせいだ。ひび割れた窓にヒビだらけの壁。……………ここって廃屋

？…………ウジ虫呼ばわり防ぐ為にはいりますか。

「先にはいるよ？」

みんなに断りを入れてからドアに手をかける。

ガラッ

ボクがドアを開けた瞬間

「早く座れ。うじ虫やろ……………う……………」

ドサッ

教卓に立っている雄二君の一言に鞆を落とした。ウジ虫呼ばわりされるのは知ってたけど、実際に言われるとショックだなあ。

「ふ……………ふえ……………」

「モミジ。どうしたの？」

「アキ君……………ボクってウジ虫なんだ……………」

ボクがそう言った途端

「総員狙えー！！！！！！」

「雄二……………覚悟はいい？」

鬼のような形相で雄二君に襲いかかるみんなと肩を握り砕かんとばかりに力を込める般若がいた。

「ちよつと待て！お前ら！何で、初対面なのにそこまで一致団結できるんだ！」

「うるさい！可愛い娘を虐めた罰、そのカラダで償うと良い！」

新田君が叫んでみんなで袋叩きにする。

「あ、あの。みんな。誤解なんだし、許してあげようよ。」

ボクのその一言に、みんなはぴたりと硬直した。

「だけど、風宮さんアイツは君に酷い事を！」

「ボクは気にしてないんだし、ね？」

「Sir！ Yes sir！」

ボクのお願いに何故かビシッと海軍式の敬礼をして雄二君を解放した。

「大丈夫？雄二？」

「ああ。何とかな。だが、明久。何でお前らがこのクラスなんだ？
Aクラスじゃないのか？」

雄二君はボク達の成績を知っているので、疑問に思っているようだ。

「僕達、体調不良で、途中欠場だったり怪我してこれなかったりで

0点なんだ。」

「そうか。だが、また同じクラスになったんだ。よろしくな。」

「こちらこそよろしくね。」

雄二君の挨拶に返してから、適当な席に座ろうとする。

「…………アレ？」

「どうしたの？」

優ちゃんにいぶかしげな表情で返す。

「なんか畳の感触がおかしいんだよ。……………ちょっと卓袱台をどかして畳の下を調べてみよう。」

ボクの言葉に卓袱台をどかしてみたら、理由が分かった。

「キャアアアア！」

そして、その原因に思わず悲鳴を上げてしまった。畳が腐って、酷い臭いと、虫がわいていたからだ。

「ひ、酷いとは思っていたが、まさかここまでとはのう。」

「…………雄二。モミジ。話がある。ちょっと来て。」

秀くんの言葉に何かを決意したように、ボクと雄二君に声をかけた。

「何だ？じきに先生が来るぞ？」

「ここじゃ話せないんだ。頼む。」

その言葉に、雄二君とボクは廊下に出た。

「んで、話って？」

「この教室についてなんだけど……………」。

「かない酷いよね。一瞬どこの廃屋に入っちゃったかと思ったもん。」

「2人ともそう思うよね？」

「もちろんだ（よ）。」「

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ、すごかったな。あんな教室は他に見たことがない。」

一方はひび割れた黒板。もう一方は値段もわからないほど立派な
プラズマディスプレイだもんね。

「明久。……………何が言いたい？」

「折角2年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと？」「

やっぱり、試召戦争する気なのか。

「うん。しかもAクラス相手に」

「……………何が目的だ？」

ずっと目を細めて問いかける。やっぱり警戒しているね。

「ここの設備が酷いからね。」

「ねえ。アキ君との付き合いってどれくらいになるか分かる？」

唐突に話を変えられて、戸惑いながら答える。

「え？お互い、母さんのおなかの中にいた時間も換算したら、17になるんじゃないかな？」

「そう。そのボクにウソが通じると本気で思っている？」

ボクのその言葉に硬直するアキ君。

「大方、瑞希ちゃんの為でしょ？」

ボクの指摘にアキ君は一瞬うつたえながらも、肯定した。

「そこまではれたら仕方ないっか。頼む。モミジ。雄二。」

「わかった。どうせ、頼まれなくても、『試召戦争』はする気でいたしな。」

雄二君のその言葉がよほど意外だったのか、きよんとした表情で問いかけてきた。

「え？何で？雄二はあまり勉強しなかったよね？」

「ああ。俺は『学力だけが、全てじゃない』と証明したいんだ。」

「ボクも喜んで手を貸すよ。よろしくね。」

差し出す、ボクの手を握り替えて雄二君が言った。

「ああ。任せてくれ。ちょうど、Aクラスを倒す作戦も思いついたしな。」

「作戦？どんな？」

「それは秘密だ。」

アキ君の問いにはぐらかして、どんな作戦かは教えてくれなかった。

「雄二君。……油断禁物。油断して負けたんじゃ、話にならないから、ちゃんと予習してきてよ。」

「…………肝に銘じとく。」

…………やや苦い顔で応じる雄二君。まあコレなら大丈夫か。

第8話 ボクとアキちゃんとFクラス（後書き）

FOOL」……で、ワイト達は何故大きくなったのかというと、

巨大ワイトキング「（みんながくれたお菓子が美味しすぎてつい食べ過ぎて大きくなってしまったのじゃ。）」

FOOL」とまあ、こんな理由らしいです。太るような贅肉もないのに不思議ですね。」

巨大ワイト婦人「（今なら巨大化50枚分じゃ。）」

くれは「……あれは、何枚合っても攻撃力を倍加するだけだから、攻撃力が600になるだけじゃ?」

巨大骨ズ「（……ガン!!!!!!）」

第9話 ボクとFクラスと自己紹介（前書き）

感想くださりました、鳴神 ソラ様、LAN武様、並びにこの小説を呼んでくださいました皆様ありがとうございます。

第9話 ボクとFクラスと自己紹介

「えー、おはようございます。2年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします。」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。……どうやら、チョークすら支給されていないらしい。というか、チョークぐらい用意しておこうよ？

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください。」

福原先生はそう言うが、不備がないところを探す方がよっぽど難しいと思うよ？

『先生。俺の座布団に綿がほとんど入ってないです。』

これはボクの座布団もそうである。

「あー、はい。我慢してください。」

『先生、俺の卓袱台の脚が折れています。』

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください。」

『先生。窓が割れてていて風が寒いんですけど。』

「わかりました。後で、ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。」

「ビニールとセロハンって応急処置じゃなかったけ？そんなことしても意味無いんじゃない？」

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください。」

学校側が何かをする気は0だな。これは。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします。」

福原先生の指名を受けて、秀君から自己紹介をする事になった。この辺りは原作と同じか。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。姉上も同じクラスにいるので秀吉と呼んで欲しいのじゃ。今年1年よろしく頼むぞい。」

そう言つて秀君が着席して、優ちゃんが立ち上がった。

「アタシは木下優子です。秀吉はあたしの弟です。また、趣味はゲームですので、新古を問わず、面白いと自信をもっていえるゲームがありましたら教えてください。」

優ちゃんはそう言つて着席する。次に立ち上がったのは背の低い小柄の男子生徒だ。

「……………土屋康太。」

康君。相変わらず、口数が少ない。そんなだから、寡^{ムツリ}黙なる性職¹者なんて言われるんじゃないかな？

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできますが、読²み書きが苦手です。」

次は美波ちゃんだ。彼女には申し訳ない気が。だって、去年アキ君を虐めてた事があったから、『愉快で楽しい108の罰』のお尻108叩きを決行したの。その結果、

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツでしたので。趣味は吉井明久にいちめられることです。」

美波ちゃんはM《変な方向にスイッチが入》ったみたい。

『吉井を殺せー！！！！』

みんなの叫びが、殺気がアキ君へと収束した。

「……………へえ。みんなは誰を殺す気なの？」

ボクのその一言にみんなは硬直した。そして、みんないつせいに土下座した。

『すみませんでした！！！！』

その後自己紹介は問題なく進みボクの番になった。

「2・F 風宮紅葉。」

ここはネタに走ってみよう思った。

「ただの人には興味ありません。未来人、宇宙人、超能力者は私の所まで来てください。」

ボクがそう言うともみんなが動揺している。それを無視して座ると、自己紹介が進んでいく。

「えー。吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでください。」

『ダーリン!!』

アキ君の言葉に、みんなの叫びがこだまする。……………うん。破壊力抜群だ。凄く気持ち悪い。アキ君も同様らしい。気持ち悪そうに座った。

「……………何やってるの?」

「イヤ。モミジがインパクトある自己紹介したから、ボクも何か受け狙わなきゃと思って。」

そんな小声の会話の間も自己紹介が進む。

「姫路瑞希です。よろしくお願いいたします。」

小柄な体を縮こまらせて自己紹介をする、瑞希ちゃんに質問の拳手が上がった。

「何でここにいるんですか？それに木下さんと風宮さんもAクラスでしょ？」

「そ、その試験の途中で熱を出しちゃいました。」

「アタシも試験途中で体調不良で倒れたの。」

「ボクの場合は試験自体受けられ無かったんだよ。」

ボク達の説明にみんなが納得した表情になる。

「そう言えば俺も熱のせいでFクラスに……………」

「ああ。あの問題だな？アレは難しかったな。」

「俺なんて弟が入院したって聞いて実力を出しきれなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「俺なんて吉井君が放してくれなくて。」

「……（明久君）（吉井）（明久）が放さないとしたら、（私です）（ウチよ）（ワシじゃ）……」

アキくんをダシにした馬鹿は三人の乙女（？）にボコられた。

その後も自己紹介は続き雄二君の番になった。

「俺はこのクラスの代表の坂本雄二だ。好きに呼んで構わない。」

「では、愛人^{アイレン}と。」

「却下だ。風宮。」

中国語で旦那様と言ったら即座に却下されてしまった。

「さて、みんなはこの教室を見回して欲しい。」

カビだらけの教室に満足に綿の入ってない座布団に薄汚れ、割れているちゃぶ台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが、」

雄二君は一呼吸おいて、問いかける。

「不満はないか？」

「……いや。不満じゃないところを探す方が難しいよ？」

『大ありじゃあっ!!』

クラスのみんなの叫びがこえました。……みんなよっぽど不満だったんですね。

「だろ？俺だって不満だ。そこで。Aクラスを相手に試召戦争をしようと思う。」

雄二君は言葉一区切りして、高らかに宣言した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5823w/>

ボクと皆のバカテス日常

2011年11月17日17時55分発行